APEC

過去・現在・未来アジア太平洋のAPEC横浜で考える

東京大学名誉教授渡邉昭士

「外交」と「国際」へ「外国交際」から

深い試みであろう。 横浜は、昨年開港150周年を迎えた。その横浜で、今年はAPEC(アジア太平洋地域の過去・現る長期的視野から、アジア太平洋地域の過去・現る・未来について考察を加えてみることは、意義在・未来について考察を加えてみることは、意義を、その横横浜は、昨年開港150周年を迎えた。その横

明治初年に福沢諭吉は『文明論之概略』 (1875

期的な意義を説いた。 期的な意義を説いた。 期的な意義を説いた。 期的な意義を説いた。 期的な意義を説いた。 期的な意義を説いた。 期的な意義を説いた。

な難しい問題を正しく理解するためのキーワード国後間もない日本社会が直面しつつあるさまざま一見、何でもない「外国交際」という言葉が、開

すれば、横浜開港150周年の記念とは、 導き出されるのは、 言い換えてみれば、 丸山眞男が明快に解説してくれている とであった。そのことは、 だというのが、 の技術としての「外交」である。このように理解 『「文明論之概略」を読む』岩波新書、1995年)。 外交事始め」の記念にほかならない。 関係であり、また、その関係を処理するため 福沢諭吉がここでいわんとするこ 近代主権国家同士の間の 福沢の言う「外国交際」 現代日本の政治学者 (丸山眞男 日本の から 玉

意味であったとも言える。となったのが、横浜開港という歴史的事件の持つ平洋地域の諸国が「国際関係」を形成する出発点会が開催されるということを考えれば、アジア太会が開催されるということを考えれば、アジア太

アジア太平洋の今日的意義

いない今日の世界では、100年に一度の大きなリーマン・ショックの影響から未だ脱しきれて

いう思いに多くの人々はとらわれている。変化のただ中に立たされているのではないか、と

う態度で歴史を見る必要があろう。 2010年)。 モイジ『「感情」の地政学―― の世紀だと思わせるものがあると言う(ドミニク・ まりつつある西洋社会と違って、 ブ・イスラムの世界や、「恐れ」の文化に色濃く染 出会うのはアジアであり、「屈辱」 が支配するアラ 分けしているかを見てみると、「希望」に最もよく れ」「希望」「屈辱」――が、 によれば、人々の抱く三つの基本的感情 際政治学者であるドミニク・モイジの最近の の歴史家たちの言う「長期持続」に注目すると はなく、フェルナン・ブローデルらのアナール派 考える際にも、 かにして世 であるとすれば、 個々の出来事に目を奪われるので 界を創り変えるか』早川書房、 APEC横浜の意味に 今日の地球をどう色 恐怖・屈辱・希望は 21世紀はアジア フランスの つい 著作 7

の中に置いてみると、その第一局面を特徴付けこれを、横浜開港以後の150年の歴史の時間

軸

き、第三の局面へと歴史は入りつつある。 き、第三の局面へと歴史は入りつつある。 き、第三の局面へと歴史は入りつつある。 き、第三の局面へと歴史を突き動かす主な動因であったという意味で、「日本の衝撃(ジャパニーズ・インパクト)」の時代であった。そして今や、「アジア太平ト)」の時代であった。そして今や、「アジア太平上の衝撃」(Asia Pacific impacts)とでも言うべ 洋の衝撃」(Asia Pacific impacts)とでも言うべ 洋の衝撃」(Asia Pacific impacts)とでも言うべ が、「西欧の衝撃(ウェスタン・インパクト)」

無論、今日の世界は、多様な主体が複雑に入りにない。しかし、ドミニク・モイジの言う「感情やすい。しかし、ドミニク・モイジの言う「感情やすい。しかし、ドミニク・モイジの言う「感情やすい。しかし、ドミニク・モイジの言う「感情ではないという「恐れ」を抱く西といるように、「希望」と「自信」に満ち溢れたアジルるように、「希望」と「自信」に満ち溢れたアジー、「屈辱」に深くとらわれたアラブ・イスラム、そしてかつての自信を失い、未来を支配するのはそしてかつての自信を失い、未来を支配するのはそしてかつての自信を失い、未来を支配するのはそしてかつての自信を失い、未来を支配するのは、という三色に、地球をきれいに塗り分けるという過度の単純化は避けなくてはならない。

それにしても、かつて岡倉天心のような明治の

のがある、と言わねばならない。 日本列島だけだと聞かされるのは、誠に感慨深いもては、今日の西欧の識者によって、アジアこそがされたアジアの中で唯一灯りのともっているのは先覚者がアジアを見渡してみて、暗黒の闇に閉ざ

る必要がある。 それだけに、人類全体の未来を明るい方向へとを小だけに、人類全体の未来を明るい方向へとを自覚すまうのかの責任の多くが、アジア太平洋地域に住まうのかの責任の多くが、アジア太平洋地域に住変えていくのか、それとも黒一色に塗り変えてし

そのような、大きな世界史的展望の中で日本の そのような、大きな世界史的展望の中で日本の た田本は、背伸びしてでも強大な西洋に伍して きた日本は、背伸びしてでも強大な西洋に伍して きた日本は、背伸びしてでも強大な西洋に伍して がかなくてはならないという冷厳な現実的要請と、 がかなくてはならないという冷厳な現実的要請と、 がかなくてはならないという冷厳な現実的要請と、 を味わわさ がかなくてはならないという冷厳な現実の中で日本の そのような、大きな世界史的展望の中で日本の

本 になった。 太平洋の中に自国を位置付けることができるよう 太平洋が形を整えはじめ、 た経済的相互依存のネットワークとしてのアジア の経済成長が徐々に進み、 ・の経済発展が牽引車となって近隣のアジア諸 われわれはそのアジア 相当程度にまで深化 玉

ようやく20

出世紀の

最後の

四半世紀に至って、

Н

芳首相 に始まる一連の あった。 覚的に位置付ける戦略として重要なのは、大平正 地 の経緯については、 |域主義の展開|| 千倉書房、2010年を参照)。 そのような歴史的展望の (当時) APEC横浜は、 の提唱による環太平洋連帯構想で 事態の直接的所産である 拙著『アジア太平洋と新しい 中に、 その意味で、 日本の未来を自 大平構想 (この 間

P

示唆する人さえいる有様である。 競争によって自然淘汰する必要があるのでは、 数の多さが問題にされ、 簇生した諸 制度間 この生存

P A シンガポールとの2国間の経済連携協定(JSE 以上からなる機構のほかにも、 発展させようという動きもある。こうした3カ国 ストラリア、ペルー、ベトナムなども含めたTP イからなるP4や、それを拡大してアメリカ、オー ニュージーランド、チリ、シンガポール、ブル 東アジア・サミット(EAS)、APECに加えて 由貿易地域)、ASEAN+3、 易機関)は別としても、 平洋地域を含むが、それを超えるWTO (環太平洋戦略的経済パートナーシップ)へと たとえば、貿易協定に限ってみても、アジア太 や、諸国間 の F TAが交渉中のものも含め AFTA (ASEAN自 たとえば、 ASEAN+ (世界貿 日本と

によって、 って整理統合するのは困 このように増殖した諸制度を、 生存競争に勝ち残ったものが現れる 開難で、 何らかの 11 ・わば自然 0) 然 基 淘 準 汰

ょ

地 地 域 域主義の「不毛の地」 制 度の過剰のアジアか

れば、

多数にのぼ

る。

誤 った認識にもかかわらず、 Ź ア Ú 地 域主 義の育ちにくいところだとい 今日ではむしろその

るであろう。とすれば、なんらかの原則を立てる必要が出てくた。しかし、仮に制度設計という概念を導入するを待つべしという考え方もあることはすでに述べ

必要かつ可能か?制度設計は

には違いがない。

が戦争である。冷戦が東西間の壁を作ることにるのは、国家間の敵意であろう。その最悪の形態は積極的に。国境を越える人間の諸活動を制約す変貌に影響を与える。一つは消極的に、他の一つ変別に影響を与える。一つは消極的に、他の一つ

ことは記憶に新しい。 よって国境を越える自由な人間活動を妨げてきた

ひるがえって、第二次世界大戦後のアジア太平 ひるがえって、第二次世界大戦後のアジア太平の1960年代後半以後、地域主義が動きはじめ、
では、朝鮮戦争とベトナム戦争が終結したあと
年の冷戦の終結後、それに弾みが付き、グローバ
環境を背景に進展を見せはじめ、さらに、1989
年の冷戦の終結後、それに弾みが付き、グローバ
りゼーションという言葉で人々がそれをとらえる
りゼーションという言葉で人々がそれをとらえる
りざっかった。

他方で、政治の積極的な関与とは、政治的意志他方で、政治の積極的な関与とは、政治的意志を、完極的には政治の問題だ」と言うのはそのたいて、「地域化(リージョナリズム)」へと事態は進む、「地域主義(リージョナリズム)」へと事態は進む、地域主義の制度設計について議論する人が、しばしば、「どのようなアーキテクチャーにするのかしば、「どのようなアーキテクチャーにするのかしば、完極的には政治の問題だ」と言うのはそのためである。

特集 APEC横浜で考えるアジア太平洋のアーキテクチャー

ることが必要か

つ

望まし

11

いう場合もある。

かし、より高次の全体

的

な

問

題関心次第では東アジ

ア

共

同

体

論

0)

ような政策を推

進す

と言うよりは、

複雑な要素を総

意志とは、単一の考慮からなる

合したものであるから、

個

Þ

0)

者は、 ある選択肢を整理すれば、「アジア太平洋主義 東アジア主義」との二つに大別できるだろう。 アジア太平洋主義を取る。 を簡単にするために、 今、 むろん、 わ n わ n 0) 前

政治的 筀 ع に

すます大きなウエイトを世界経 あることから見て、 シンガポー 疑問 ルとの間 この余地 は 済 0 Ē の中 な P 11 一で占っ Α

め

つ

2国間の経済連携協定の締結、 従って、 ASEAN自 0) よう

0)

関

係

0)

緊密

そし

そ

由

習

東

ア

ジ

T

強化

0)

重

要性

3 国 中韓3 主 外交戦略にお 呼ぶとすれば、日本の今後 を総称して東アジア主 は明らかである。仮にこれ など、とくに最後の 易協定とのリンク、 を占めることは 義 が 問 極 玉 0 め 関係 間

義

ع

占 略に 太平 相 め 容 洋主 かし、 る お n な ベ 11 て最 義 e V きだと このことは わ が け 重 日 では 要 W 本 う主 0) 0) 決 外 地 7 張 位 Ý 交 7

年 が 係

おける中

国やインド、

そし

必要かつ望ましいことは、

近

7

東

南

アジア

諸国

|の経済

「がま

経済関係を深め、 選択であろう。

政治・外交関

0)

層

の親密化を図ること

義

(APEC重視論)

が正

13

アジア諸国との

視野に立てば、

アジア太平洋主



APEC JAPAN 2010 における貿易担当大臣の全体会合(2010年6月6日)。

て高

11

先

順 Ý

11

て、

7

間

違 優 東

が

な 位 7 0

ない。

保障能力があったし、日米安保体制があった。
経済的発展を支えていたのは、全体として安定的
述べた通り、1960年代以降のアジア太平洋の
その理由は以下の二つである。第一に、先にも

条件であった。

9・11後のアメリカは、イラクやアフガニスターの状況に(誤って)深入りし、それに多大なエンの状況に(誤って)深入りし、それはアジア太平洋の見地からすればマイナスであったことが逆に示すように、「安全」という国際公共財の供給者に示すように、「安全」という国際公共財の供給者としてのアメリカとそれを支持する日本やオースとしてのアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクやアフガニスター・11後のアメリカは、イラクをアメリカによりでする。

義は高まりこそすれ、失われるものではない。アメリカと中国を共に包含するAPECの存在意すこの点は重視されるべきであり、その意味から従来より格段に増している状況の下では、ますま中国の動向によって今日の影響を受けることが、

盟の地中海沿岸諸国とを結びつけるという構想ら

を唱えているという。これは、EU加盟国と非加

ロッパとアフリカを結ぶのがサルコジのフランス

しい。言い換えれば、

地中海を媒介にして、

の大平正芳のアジア太平洋連帯構想の根底にあっ ジアの中の日本」とが手を結ぶ意味もそこにある。 らば、「もう一つの西洋としてのアメリカ」と「ア た哲学だし、私好みの言い方を許してもらえるな て「過去」と「未来」をつなぐことが、そもそも せていただくならば、「西洋」と「アジア」、そし との対比で「アジア」という言い方をここで使わ ようなタイプのアジア主義は禁物である。 「西洋」 西洋からの反発と疑念は高まるばかりであろう。 確かだが、そのアジアが閉鎖的・内向的になれば、 アジアこそ希望の土地だという見方があることは ク以後の経済的混迷から世界が抜け出すためには、 の地政学」的考慮からである。リーマン・ショ 中でも、アメリカ人に不必要な不安を抱かせる フランスでは、サルコジ大統領が「地中海連合」 第二の理由は、ドミニク・モイジの言う「感情

特集 APEC横浜で考えるアジア太平洋のアーキテクチャー

0) 夢なのであ

理 大平構想以 として共有する国々 ながら立ち消えに 条件を持っている。 つに結ぶアジア太平洋主 念の たとき、 # Ń 延長線上 コジ構想 後 太平洋をはさむアメ 0) 日本外 にある。 0 なった感のある、 前途に横たわ 'n 福 交が 間 田 0 義 康夫首相 連合という夢 は、 貫して追求してきた リカとア る いくつも 巨 (当時) 大な問 太平洋を内 ば、 Ú 0 有利 が ァ 題 実は、 唱え を に 比

郎とい 消えていないし、 本の 正芳や第二次大平 うな活力を失ったの 確 E か に、 2 際派エコノミストとして活躍 た先人が 今 日 0) 消してはいけない 灯した「希望」 内閣 日 本経済: かもしれ で外務大臣を は、 な 1 · 1 9 0 のである。 務 8 灯 しかし、 した大来佐 ŏ は め 年代 戦 13 まだ 後 0) 宷 武 ょ H

> も速い ぬアジアであったのである」。 ペ Ī スで政府間機構 が増え続け た の は ほ か

> > なら

(2)

シ ョ 方については、 2009年) (千倉書房) グローバリゼーションという言葉に 渡邉昭夫編 ては、 (日本経済新聞社、 小野善邦 人類5万年のドラマ』上下 2010年)。 で記述している。 『アジア太平洋と新 ナヤン・チャンダが 『わが志は千里に在り 2004年) また、 とくに 大来佐武郎の事績に L い地域主義の展 つい 『 グロー が詳しい。 第8章に詳し $\widehat{\mathsf{N}}$ ての 評伝・大来佐 Т バ 篺 Т ij 解 出 ゼ の 開 L١ 仕

(3)

渡邉昭夫 わたなべあきお

域主義的な動きが盛んであった。地球上のどの地域より

心と期待が高まっていた1960年には、

アジアでも

(1)

曺良鉉

アジア地域主義とアメリカ』

(東京大学出版会

2009年)

によれ

ば

欧州における地域主義

の関

平和·安全保障研究所理事長、東 京大学、青山学院大学名誉教 授。1958年東京大学文学部卒。 1967 年オーストラリア国立大学で Ph. D取得。香港大学講師、明 治大学助教授、東京大学助教授、 同教授、青山学院大学国際政治 経済学部教授を経て、2000年平 和·安全保障研究所理事長。専攻 は国際政治学、日本外交論。主な 書に、『戦後日本の政治と外交― 沖縄問題をめぐる政治過程」(福村 出版、1970年)、『アジア・太平洋 の国際関係と日本』(東京大学出 版会、1992年)、『日本の近代(8) 大国日本の揺らぎ 1972-』(中央公 論新社、2000年)他多数。